

に陽が当たると、きれいなキューティクルの輪ができる。

あ、天使。のわけないだろ！と自分に突っ込む。

「なんだよ」

「しおん、あらったげる」

「へっ？」

「あらったげる」

自分のことをしおんと言うその子は、水道の下にあるたらいの中から芥子色のスニーカーをつかんで、はにかむようにもう一度、風汰を見上げた。首のうしろに、緑色の帽子が引っかかっている。

こいつ、きりん組なんだ。さっき部屋にいたっけ？ 思いつくまで、頭を浮かぶのはきりん組の騒々しさだけで、どの子の顔もはっきりしない。

シュゴシュゴシュゴ

しゃがみ込んで、たわしをスニーカーにあてている。小さな背中が前後に動く。

「いいって、あっちいってろよ」

風汰が洗剤『DON』を水道の横にある切り株に置いてしゃがむと、しおん君はふるふると首をふった。

シュゴシュゴシュゴ

しおん君は手を止めると、立ち上がってかかとを浮かすようにして、切り株の上にある洗剤に手を伸ばした。

ばしゃ！

「うわっ」

フタだけをしおん君の手に残して、洗剤はたらいの中へ落ちた。

「あっちゃー」と、風汰が手を伸ばした瞬間、しおん君はひゅんと首を縮め、両手を耳にあてて目をつぶった。

驚いたときのカメラみたいだ。風汰がぶつと笑う。

「こんだけ使ったら落ちるかもなあ、泥」

しおん君がそっと目を開けた。風汰がゲラゲラ笑うと、しおん君は頬を赤くした。

「ほれっ」と、片方を渡すと、うれしそうにしおん君はうなずいて、勢いよく水を出した。

たらいの中で盛大に洗剤が泡立つ。シャボン玉が三つ宙に浮き、風につけて空へまいあがった。

十一時になると、園庭は急に慌ただしくなった。「お部屋に入りますよ」というショートカットの保育士の声に一齐に片付けがはじまったのだ。

園庭のあちこちにはぶちまけられている原色のバケツ、まごごとで使っていた皿やコップを大きさや種類別にかごの中に入れていく。ただの野生児の集団かと思ったら、片付けのできる野生児の集団だった。と風汰は感心した。

「ねえってば！」

「んあ？」